様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３１８

研究課題名（和文）グローバル時代の草の根の文学

研究課題名（英文）Literature at the Grass Roots in the Global Age

研究代表者
大池　真知子（OIKE, MACHIKO）

広島大学・ダイバーシティ研究センター・教授

研究者番号：９０３１３３９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、ウガンダで書かれている「メモリーブック」を例に、グローバル時代の草の根の文学について考察した。メモリーブックとは、HIVとともに生きる親が、子どもに宛てて、家族について記す小冊子である。書き手の大半は、初等教育未修了者を含む農婦である。
　メモリーブックは三つに大別される。１．村の日常が素朴な言葉で書かれたもの。エイズの苦しみはあまり書かれず、家族団欒、畑仕事、教会や社会活動が書かれる。２．病の苦しみや家族の軋轢などが、記述のなかにつなぎとめられているが、内面の掘り下げは不十分にとどまるもの。３．内面の苦悩に言葉が与えられているもの。10年以上の教育を受けた書き手に多い。

研究成果の概要（英文）：The researcher examined Memory Boook written in Uganda as an example of literature at the grass roots in the global age. Memory Book is a workbook written in some parts of Africa by parents living with HIV for their children about their family history. Most of the writers are peasant widows who have barely finished primary school. They attend workshops hosted by NGOs and help each other to write.
The researcher has found out that Memory Book can be calssified into three categories. The first is the ones which describe daily lives in the rual area in simple and plaine words. The agony of AIDS is not their main theme; rather, family lives, farming, church, and social gatherings are. The second is the ones in which deep themes such as the agony of AIDS and conflicts among family members are traceable, though not described in vivid details. The third is the ones which present the agony and anguish eloquently. The wtiers with more than 10 years of education write the third type.

研究分野：アフリカ文学

キーワード：文学　アフリカ

１．研究開始当初の背景

（1）研究代表者は2013年に著書『エイズと文学』を発表し、エイズをテーマとするアフリカの小説、演劇、テレビドラマ、ライフストーリーなど、さまざまな文化活動について論じた。そのなかで読者の強い関心を呼んだのが「メモリーブック」であった。

「メモリーブック」とは、アフリカの複数の地域で、HIV陽性の親が、子どもに宛てて、家族の歴史や子どもの生い立ち、さらには親自身の半生などについて記した小冊子である。書き手の大半は、村で小規模農業を営む寡婦で、せいぜい初等教育修了程度の学歴しか持たない。なかには、自分で書くことができないため、口述した内容を代理筆記してもらう人もいる。HIV とともに生きる庶民が、自分自身の言葉で、HIV と家族について語るという点で、メモリーブックは、エイズにまつわる他の多くの文化活動と異なっていた。

（2）このような作品は、アフリカ文学研究では論じられたことがなかった。というのも、アフリカ文学は、Karin Berber が1987年に定義して以来、各地で口承で伝えられてきた物語、世界の読者を対象にしてエリートが書いた純文学、都市の中間層を対象にする大衆的な文学の三つにおおよそ分けられてきたからだ（“Popular Arts in Africa,”African Studies Review 30-3, 1987: 1-78）。

メモリーブックは、三つのいずれにも当てはまらない。メモリーブックは、その世界観やリズムの点で口承の物語と似ているが、同時に、エイズにまつわるグローバルな支援活動のなかで書かれていることから、現代性も持ち合わせている。じっさい書き手は、支援団体が主催するワークショップに参加して執筆するために、活動の語りを取り入れて書くこともしばしばである。

つまりメモリーブックは、グローバル時代の草の根の文学としてとらえることができる。その様態を明らかにする必要があると考え、本研究の着想に至った。

２．研究の目的

本研究は以下の二点を目的とした。

(1)グローバル時代の草の根の文学としてのメモリーブックには、どのような特徴があるのかを、テクストを詳細に分析することで明らかにする。

(2)テクストの分析をとおして、遂行的に、草の根の文学作品の読み方を見出す。

３．研究の方法

本研究は以下の二つの方法によった。

(1)テクスト分析

支援団体を通じて、30冊程度のメモリーブックを収集した。英語で書かれたものに限定し、テクストを精読した。

精読をつうじて、複数のメモリーブックに共通する特徴を明らかにすると同時に、書き手一人ひとりの経験とその表現方法を明らかにした。

(2)聞き取り調査

書き手だけでなく、家族、代理筆記者、活動団体職員に聞き取り調査を行い、ワークショップの様子と執筆の過程を明らかにした。

４．研究成果

（1）メモリーブックの三つのタイプ

メモリーブックは、その内容にしたがって、以下の三つに分類できることが明らかになった。

①村で支えあって生きる日常を描くもの

HIV とともに生きる親が子どもに宛てて書くというと、深刻な内容を予想するが、大半のメモリーブックは意外にあっさりしている。エイズを語るときには、エンパワーメントの語り――感染を知って衝撃を受けたが、支援を受けて前向きになり、治療して健康を取り戻した――が目立つ。

理由はいくつか考えられる。第一に、書き手たちはワークショップで仲間と経験を共有し、たがいにエンパワーしあっており、したがってメモリーブックを書くときには、エンパワーメントの語りから外れる暗い想いを言語化しにくいと推察される。

第二に、書き手の多くは、教育程度が高くない農婦であり、文章を書き慣れていないため、書記文化特有の内省――内面を探って、懊悩に言葉を与え、それに向き合う――をしないのだと思われる。下の③に分類されるような教育水準が高い書き手には内省が見られることからも、そう推察できる。

第三に、彼女たちは、自分に関心を向けるのを慎むという美徳を持っているため、子どもに宛てて書く冊子で、自分の苦しみを口にするのを控えるのだと思われる。じっさい、「私にとって特別なもの」や「暇なときにすること」といった項目に何を書けばいいのか分からなかった、という意見が聞き取り調査で聞かれた。自分特有の何かについて書くよう言われてとまどい、好きにしていい時間に何をしているか思い浮かばないのである。

大半の書き手がメモリーブックに書いているのが、HIV とともに生きる苦しみでないとすれば、彼女たちは何を書いているのだろうか。

彼女たちが書いているのは、人々と支えあって生きる村の暮らしである。畑仕事をし、家族と団らんし、ラジオを聴く。活動グループの会合に行き、教会に集う。そういった何の変哲もない村の暮らし、そこでの人との触れあいを、彼女たちは書き記している。

これらは、エイズの苦しみと比べるとあまりに平凡な内容ではあるのだが、メモリーブックが伝えるもっとも重要なメッセージだと研究代表者は考える。こういうあたりまえの村の暮らしが、村の女たち自身の言葉で描

写されることは、これまでほとんどなかったし、たとえ彼女たちが書いても、私たちの多くはそれを読もうとしてこなかった。エイズとか飢餓とか内戦とか、問題について語られれば、それに耳を傾けてきたかもしれないが。しかし、彼女たちの問題を理解するためには、問題が奪う彼女たちの日常、そして、問題があっても彼女たちが続けようとする日常を、彼女たちの視点から知る必要がある。

②エイズの苦しみを行間に漂わせるもの

このように、メモリーブックのトーンは往々にして明るく、まじめに働き、ともに助けあう母親たちの姿を伝えるのだが、丁寧に読めば、深刻な事態を思わせる描写も端々に見つかることもある。たとえば、子どもを HIV の母子感染で亡くしたとか、感染が分かって夫に離縁されたといったことだ。

ただし、問題を掘り下げて書くことは多くなく、たいていは数文で事実を描写して、すぐに次の話題に移ってしまう。このように淡白な扱いをするからといって、彼女たちにとって問題が些細だというわけではない。考えても仕方ないからあえて頭を悩ませないし、先に述べたように、そもそも内面を掘り下げることをしないのだろう。

③エイズの懊悩にペンで迫るもの

だが、まれに、内面の苦悩を掘り下げて描写する人もいる。書き手の 1 割程度は教育を 10 年以上受けている。彼女たちはペンで自分の内面に向き合い、奥底にある苦悩を記し、記すことで苦悩から自分を解放する。たとえば高校の教員だった書き手は、4 頁以上にわたって、検査で HIV 感染を知らされた衝撃、感染をひた隠しにする孤独、夫の死後に自分もエイズを発症した絶望を、詳しく綴っていた。

彼女たちの執筆の姿勢は、村の女としては例外的だが、彼女たちが書く苦しみはけっして例外的ではない。普段は前向きに生きている多くの書き手にも、この苦しみに覚えがあるはずで、じっさい②のタイプのメモリーブックでは、行間に苦しみがつなぎとめられていた。①のタイプでも、簡潔な言葉で事実を報告するといった調子ではあるが、辛い経験の片鱗が切り取られることもあった。つまり③の書き手は、①や②の書き手では言葉にしがたい奥底の想いに言葉を与えているといえる。

(2)メモリーブックが語ること

以上に述べてきたように、メモリーブックには、口承の語りに近いものから文学的な完成度が高いものまで、さまざまなものがある。それらの多様なテクストを精読してきて明らかになったのは、メモリーブックが全体で「HIV とともに生きる」という人生を多層的に奏でているということだ。

書き手たちは HIV 感染という重荷を負ってはいるものの、ふだんは元気に前向きに、つまり「ポジティブに」生きている。多くのメモリーブックを読んでも、「エイズの苦悩」らしきものはあまり出てこない。彼女たちだって四六時中エイズに悩んでいるわけでもないし、どちらかというと、ふだんは忙しさにまぎれて、感染のことは忘れているくらいだからだ。メモリーブックを読むとき、私たちはエイズばかりに注目しがちだが、本人からしてみると、エイズは自分の人生の一部でしかない。それは大切な一部ではあるが、しょせん、一部でしかないのである。人ひとりの人生というものは、要約することのできないさまざまな細部――凡庸かもしれないが欠くことのできない細部――から成っていて、それらをなんであれ、単一の問題に帰すことはできないし、帰してはならない。

メモリーブックがエイズ以外の細部を伝えることができるのは、メモリーブックの書式によるところも大きい。メモリーブックは約 30 の項目に分かれ、それぞれ B5 程度の書き込みスペースが設けられている。約 30 項目のうち、もっぱらエイズについて書くよう想定されているのは、「私の健康」のみである。それ以外の多くの項目――「私の趣味」や「私の幼少期」など――は、「私の健康」と同じ重みをもって並べられ、全体で一冊のメモリーブックを構成している。これらの雑多な項目を埋めながら、書き手は、自分の人生にはエイズ以外のさまざまな思い出や営みがあって、それらは自分に驚き、悩み、安らぎを与えてきたことを知るだろう。そして読む者もまた、一冊のメモリーブックを読むことをつうじて、書き手の人生をエイズに還元すべきでないことに気づくのである。

とはいえ、エイズは書き手たちの生を深いところで規定していることは確かである。ふだんは感染のことなど忘れていても、彼女たちは一日一回、かならず同じ時間に、薬を飲まなければならない。つねに食生活に気を配り、ストレスをためないようにしなければならない。過去を想えば後悔し、将来を想えば不安になる。そういった苦しみは、「私の健康」にかぎらずさまざまな項目に、濃淡の差はあれ少なからぬ影を落としていた。多くの書き手は、③のタイプのようには「エイズの苦悩」を記していないものの、だからといって、「エイズがもたらす実存的ともいえる悩みは、ある程度学歴のある者の悩みであって、普通の村の農婦たちはそのような悩みは持たない」と考えるのは、決定的に誤っている。③に見られるものと同質の悩みは、①や②の行間に痕跡を残していた。

書き手たちにもいろいろな層があり、書き手一人ひとりの心のなかにもまた、いろいろな層があって、メモリーブックはそれらを丸ごと伝える。書き手はそれぞれの場で、それぞれの姿勢で、HIV とともに生きていて、それぞれのやり方で、その時々の生きざまをメモリーブックに記した。その結果、HIV の部分を前面に出すメモリーブックが書かれることもあれば、生活の描写が目立つメモリー

ブックが書かれることもあった。しかし、すべてのメモリーブックは、HIV とともに生きるさまを、HIV だけに還元することなく、暮らしのなかで丸ごと、暮らす人自身の視点で、伝えている。それによって、私たち読む者は、書き手たちにはエイズ以外の人生もあること、そしてそれがエイズによってどうしようもなく傷つけられていること、しかし書き手たちは、傷つきながらもそれぞれの人生を歩み続けていることを、知る。

(3)筆記支援

本人に十分な識字力がなく、口述して代理筆記で書く場合、代理筆記をする支援者の役割が大きいことも明らかになった。

研究代表者が読んだメモリーブックの約半数が、代理筆記によるものだった。そのなかで、文学性が高いもの、つまり、感情の奥行きを感じさせるものは、親戚やカウンセラーではなく、メモリーブックのトレーニングを受け、みずからも HIV とともに生きる母親が、代理筆記をしていた。この代理筆記者は、声なき声に耳を傾けて言語化するのに長けているのだと思われる。たとえば、本人が本音を洩らせるよう、何を言っても「不道徳」だと非難しないとか、注意深く耳を傾け、ふとこぼす本音を聞き逃さないといった技術があるのだろう。また、彼女が書き手(語り手に近い場合もあろう)本人と同じような背景を持ち、同じような経験をしているということも、両者が心を通わせるのを助けているはずだ。

多くの人は、このようにトレーニングを受けた支援者でなく、親戚に代理筆記してもらっているが、その場合、本人の心の奥にある本音を言葉にするという面では、不十分なことがあると思われる。本人と代理筆記者のふだんの関係が影響して、本人が本音を語りにくいことがあるだろうし、代理筆記する側も、家族のことについては自分の言い分があったりするだろう。家族が代理筆記する場合には、代理筆記者が本人の意思を尊重するよう細心の注意を払わないかぎり、本人がみずからの想いをメモリーブックに表現するのはかなり難しいのではないだろうか。

したがって、家族が代理筆記する場合は、メモリーブックを、本人の心を表現する場としてとらえるのではなく、家族みなで協力し合って、家族について記す場としてとらえなおした方が無理がないし、実情に近いように思われる。

かりに、書き手の表現としてでなく、家族の記録としてメモリーブックをとらえなおすならば、メモリーブックから浮かび上がる問いも、本研究とは大いに異なってくる。多くの家族が参加して書いたメモリーブックの方が、多くの家族に読まれるのだろうか。さらに、読み手だった子どもが書き手になる場合があるが、それはどう解釈すればよいのだろうか。たとえば、親が書いたメモリーブックを子どもが引き継いで、その後も自分で情報をアップデートしているという例があった。あるいは、母親が書いたメモリーブックには父親の情報が欠けていたので、子どもがあらたに別の冊子を入手して、父親について自分で調べて書いたという例もあった。後者の例では、子どもは、年の離れた妹のために、自分がメモリーブックを書いてやるつもりでいるという。このように家族に開かれたメモリーブックの場合、メモリーブックの文章の面で、あるいは家族関係の面で、何らかの特徴があるのだろうか。家族が自分たち家族の物語を書くこと、読むこと、そして家族が関係を紡ぐことは、いかに交わっているのだろうか。

これらの問いに答えるには、本研究とは別のアプローチによる研究が必要であろう。まずは、メモリーブックを書くのに家族がどのように関わり、メモリーブックを家族がどのように読んだかを聞き取り調査する。さらに、家族の関与がメモリーブックの表現にどう影響しているかを、テクスト分析で明らかにすることになる。しかし残念ながら、メモリーブックはここ数年あまり書かれておらず、本研究で分析したメモリーブックも、執筆からすでに 10 年ほど経過しているものが多い。そのため、執筆にかんして聞き取り調査をしても、正確なところが分からないことが懸念される。メモリーブックを書くプロジェクトをあらたに行う方が生産的だろう。そのさい、代理筆記者向けのワークショップも行うことが肝要となる。

(4)読み方の工夫

メモリーブックは、書き慣れていない書き手が、ときに代理筆記という形で、書き記したものであるため、言葉足らずな場合も多い。そのため、読み取りにさいしては、いくつかの工夫を要した。

①のタイプを分析するには、複数のメモリーブックを読んで、共通すると思われる要素を抽出した。抽出するさい、語彙の頻度を数値化するのではなく、メモリーブックを読みなれた研究代表者自身の感覚によった。そのため、研究代表者に読みの枠組みがないために読み落とした共通点、あるいは、研究代表者が強い関心を持っているために目についた共通点がある可能性はある。30 冊ものテクストを横断的に読む方法については、今後の課題としたい。

②のタイプを分析するには、書き手にインタビューすることで、文章に十分表現されていない経験に迫ろうと試みた。とくに書かれた文章を本人が読めない場合は、メモリーブックに貼られた写真について語ってもらうことで、その当時の経験を引き出すようにした。分析のさいにも、文章だけでなく、写真も併せて分析することで、書き手の経験を明らかにした。とくに、写真と文章の齟齬に注目し、文章の行間を読み取るように心がけた。

③のタイプは、通常の文学作品と同様に、テクストを精読した。書き手にインタビューすることで、書かれなかった細部を明らかにし、書く力があるにもかかわらず、あえてそれを書かなかった背景を考察した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①大池真知子「ナイジェリアの小説が表象する女同士の性愛――ラジナット・モハムドによる小説『ハビバ』」『黒人研究』査読有、87号、2018年、77-87頁
②大池真知子「アフリカの農婦が書いた家族の物語」『人間文化研究』査読有、8号、2016年、21-37頁
③大池真知子「アフリカの草の根のエイズの物語――ウガンダの母が書く病、死、生」『α-Synodos』査読無し（依頼論文）、173号、2015年6月1日、Eジャーナルのため頁なし
④大池真知子「女たちの声に耳を澄ます――映画『終わらない戦争』が表象する『慰安婦』と『慰安婦』問題」『アジア社会文化研究』査読有、16号、2015年、71－94頁
⑤大池真知子「エイズと評伝――アフリカでHIVとともに生きる他者について書く」『人間文化研究』査読有、7号、2015年、5－23頁

〔学会発表〕（計１件）
大池真知子「アフリカのおばちゃんの文学――『メモリーブック』を読む」成蹊大学アジア太平洋研究センター・プロジェクト「ネイションと文学」成蹊大学、2016年8月7日、招待講演

〔図書〕（計１件）
大池真知子「アフリカでビジネスと紛争にかかわる日本人たち――日本の現代小説にみるアフリカのイメージ」『アジアから考える――日本人が「アジアの世紀」を生きるために』水羽信男編著、有志舎、2017 年、16-40頁

〔その他〕
ホームページ等
①研究報告
大池真知子「ウガンダの農村でHIVとともに生きる母が書いた家族の記録――『メモリーブック』の研究報告」『黒人研究』86号、2017年、44-47頁
②講義
大池真知子「『アフリカのおばちゃん』のくらしと想い――メモリーブックを読む」2016年10月20日、広島県立広高等学校、広島大学模擬授業
③パネルディスカッション
大池真知子『怒りを力に　ACT UPの歴史』上映会、横川シネマ、2014年12月13日、コメンテーター
④パネルディスカッション
大池真知子『終わらない戦争』上映会、広島大学東広島キャンパス、2014年12月12日、コメンテーター
⑤講演
大池真知子「アフリカの地から学ぶこと」東広島市中央生涯学習センター、2014年10月30日、広島大学連携講座　公開講演会

６．研究組織
(1)研究代表者
大池　真知子（OIKE, Machiko）
広島大学・ダイバーシティ研究センター・教授
研究者番号：90313395